麦畑の主イエス

マルコによる福音書　２：２３－２８

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 6 月 2 日

聖霊降臨後第 2 主日

上野聖ヨハネ教会にて

「ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。」マルコ 2:23

麦の穂がいっぱいに実って、収穫を待っています。ちょうど今ごろです。わたしが住んでいる家から5分も行くと、麦畑が広がっています。今、麦がもう黄色から茶色くなっていて、穂がいっぱい実っています。その麦畑の間の細い道を、イエスと弟子たちは通って行かれたのか、と想像してみます。

ちょうどその日は土曜日でユダヤ教の安息日。イエスは午前中はどこかの会堂礼拝に出席されたか、あるいは独自に祈りの時を持たれたかして、その午後のことです。

「弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。」

よほど空腹だったのでしょう。

勝手に他人の畑の麦を摘んでよいのか、という疑問が湧くかもしれませんが、これは聖書では「よい」とされていました。旧約聖書・申命記にこう書かれています。

「隣人のぶどう畑に入るときは、思う存分満足するまでぶどうを食べてもよい……。隣人の麦畑に入るときは、手で穂を摘んでもよい……。」23:25-26

これは、貧しい人たちを守るために神が定められてイスラエルの律法となったものです。土地を持たない貧しい人たちが生きることができるように、ぶどうも麦も刈り尽くさないように、

貧しい人たちの分として残すようにと、神が定められた。神がそう定めてくださったのですから、遠慮したり気兼ねしたりすることはないのです。

ところが弟子たちが麦の穂を摘んでいるのを見たファリサイ派の人々が、イエスに詰問します。

「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」マルコ 2:24

これがイエスを敵対視したファリサイ派です。貧しい人たちのことを大切にされる神の律法の精神など思ってもみません。自分たちが律法をよく知り、よく実践し、それを人々に見せびらかす。と同時に、律法違反者を厳しく追及する。とりわけこのごろ急速に多くの民衆の信頼と支持を得てきているイエスを、この機会にやり込めようというわけです。

ファリサイ派の考えはこうです。――神は安息日を必ず守るようにと命じられた。その日は働いてはならない。麦の穂を摘むことは収穫であり、明らかに労働にあたる。安息日には働いてはならないと定められているのに、あなたの弟子たちはどうして神の律法を破るのか。

ちょうど今日の旧約聖書日課に安息日の掟が出て来ました。

「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、

七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。」申命記 5:12-14

ファリサイ派の追及を聞いて、弟子たちは自分たちが神に逆らったのではないかと恐れました。ところがイエスはファリサイ派の人々にこう言われました。

「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」マルコ 2:25-26

これはずっと昔のことですが、まだダビデが王になる前、サウル王に追われて脱出したときの話です（サムエル記上 21:1-7)。食べ物に窮したダビデは知り合いの祭司に頼んで、供え物のパンを食べ、一緒にいたお供の者たちにも食べさせた。このパンは神のために聖別したもので、本来祭司のほかはだれも食べてはならないはずのものだったが、祭司はそれを提供してくれた。必要な時には、細かい規則よりも、人の命を守ることのほうが優先される。そのことがちゃんと聖書に書かれているではないか、とイエスは言われたのです。

さらにイエスはこう言われました。

「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあ

るのではない。」マルコ 2:27

ファリサイ派の人々は反論できず、いまいましい思いをしながら立ち去りました。

ところで安息日の掟の精神は、先ほどの申命記にも実は明らかに記されています。ここは、モーセがイスラエルの会衆に対して、主なる神の言葉として十戒を語った箇所です。もう一度読んでみましょう。

「安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」申命記 5:12-14

実はこの後に続く言葉が大切です。

「そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。」5:14

安息日の趣旨、つまり神の意志とは、平たく言えばこういうことです。――人間には休むことが必要だ。だからあなたも休み、家族も周りの人も家畜も休ませなさい。安息日には礼拝の時を持って、わたしから新しい命と力とを得なさい。

創世記第 1 章によれば、神は 6 日をかけて天と地、植物と動物、そして人間を造り、そうして7日目には休息された、と書かれています。神が休まれたのだから、人間も休む。休んでこそ、人は生き続けていけるのです。安息日の掟は、「あなたがたには休みが必要だから自分も休み、人も休ませなさい」という神の愛の表現です。しかしこのことをファリサイ派の人々は思ってもみませんでした。

イエスは安息日の本来の精神を、あの麦畑ではっきりと回復させられたのです。生きるためには、麦の穂を摘んで食べよ。

「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」

マルコ 2:27-28

ファリサイ派の人々が去った後、イエスは弟子たちと一緒に小高い丘の上に腰を下ろされました。ずっと向こうのほうまで麦畑が広がっています。弟子たちは先ほど摘んだ麦の穂を、イエスと一緒に食べました。どんな食べ方をしたのでしょうか。ルカ福音書には「手でもんで食べた」(6:1) とあります。

この貧しい食事が、この上なくおいしい、うれしい食事でした。先ほどまではファリサイ派に責められてひどく緊張した。しかし今はその緊張も恐れも消え失せて、安らぎが満ちています。イエスが安息を与えてくださった。この安息日に、弟子たちはほんとうに深い安息を味わいました。

ご自分が**「安息日の主である」**と言われたとおり、安息日の精神を、神の愛と正義を体現しておられるイエスが一緒におられるのです。何を恐れる必要があるでしょうか。

イエスが別の時に言われた言葉を思い出します。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」マタイ 11:28

ギリシア語を直訳すれば

「わたしが あなたがたを 休ませてあげよう。」

イエスがわたしたちを休ませてくださるのです。

あの弟子たちと同じように、わたしたちもまた、このイエスのもとで安らぎと力を与えられて、日々を主とともに歩んでいきます。

祈りましょう。

主イエスさま、わたしたちが疲れたとき、あなたのもとで休ませてください。わたしたちが受ける非難や攻撃からわたしたちを守ってください。そうしてあなたから勇気と力をいただいて、恐れることなくあなたとともに日々を歩ませてください。アーメン